

シームレスな外壁に突出した光と風を導くGILL

Protruding GILLS on a seamless exterior wall drawing in light and wind

オーディオテクニカ本社 早稲田大学赤坂喜願研究室, 竹中工務店(設計施工)
by WASEDA UNIVERSITY AKASAKA YOSHIAKI LABORATORY, TAKENAKA CORPORATION

今日の
ディテール
DETAILS
UP TO
DATE

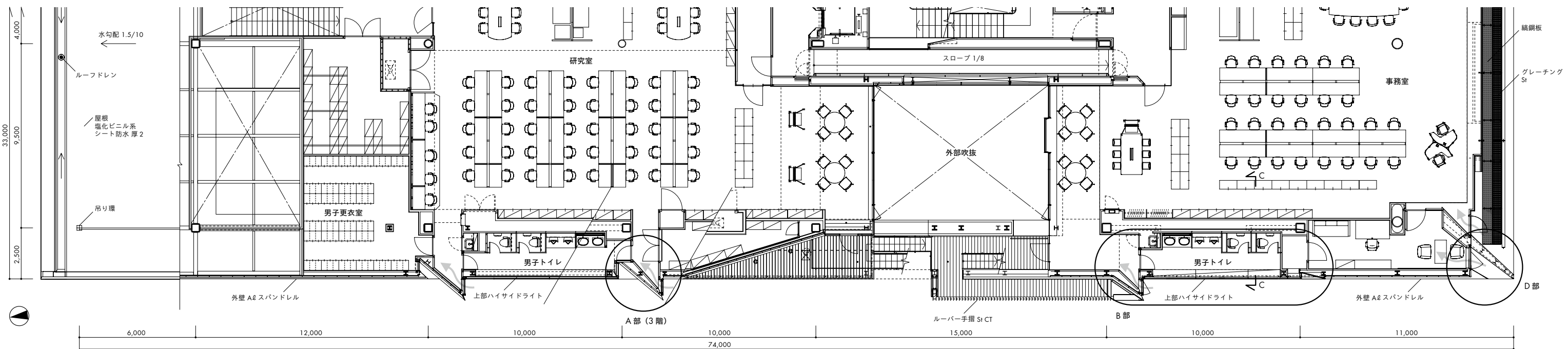
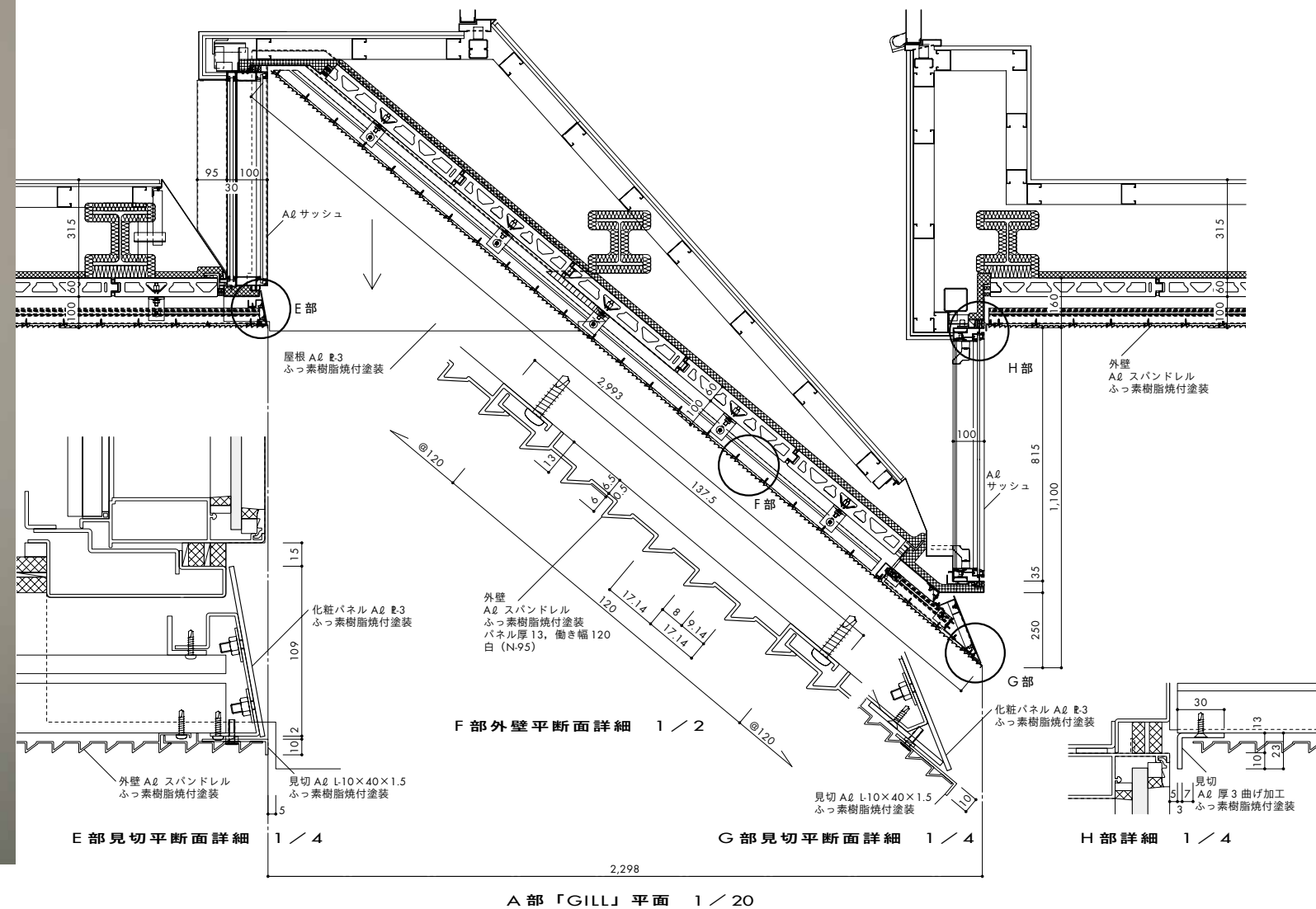




高品質な音響製品の開発から製造まで一貫して手掛ける世界的なメーカーのためのコーポレートアーキテクチャー。一つの大きな片流れ屋根の下に高低差のある敷地条件やさまざまな内部の異なる要求に応えるための外被を、微妙な角度がついたアルミスパンドレルでフラットに納めつつ、随所に光と風を内部

に導く三角形のGILLやスリットを設けて対応し、全体として変化に富んだ美しい外壁を織りなすことに成功している。これだけ分節化したファサードを操作するために躯体の外側にクラディングという手法で外被を設けて、雨水処理はクラディング内部で行っているため、ジョイントはすべてオープンで納

められまことにすっきりと見える。GILLとは魚のエラのことであるが、単なる出窓とは違い裏表にスリットが開けられ各々異なる光を取り入れているので、その内部の光の豊かさには驚かされる。



4 階（一部 3 階）平面 1 / 200

6つのキーワードでみる 階段空間の現在

美島康人・小堀哲夫

ENCOUNTER
出会う

OPEN
開く

LINK
つなぐ

MOVE
動く

遊ぶ
PLAY

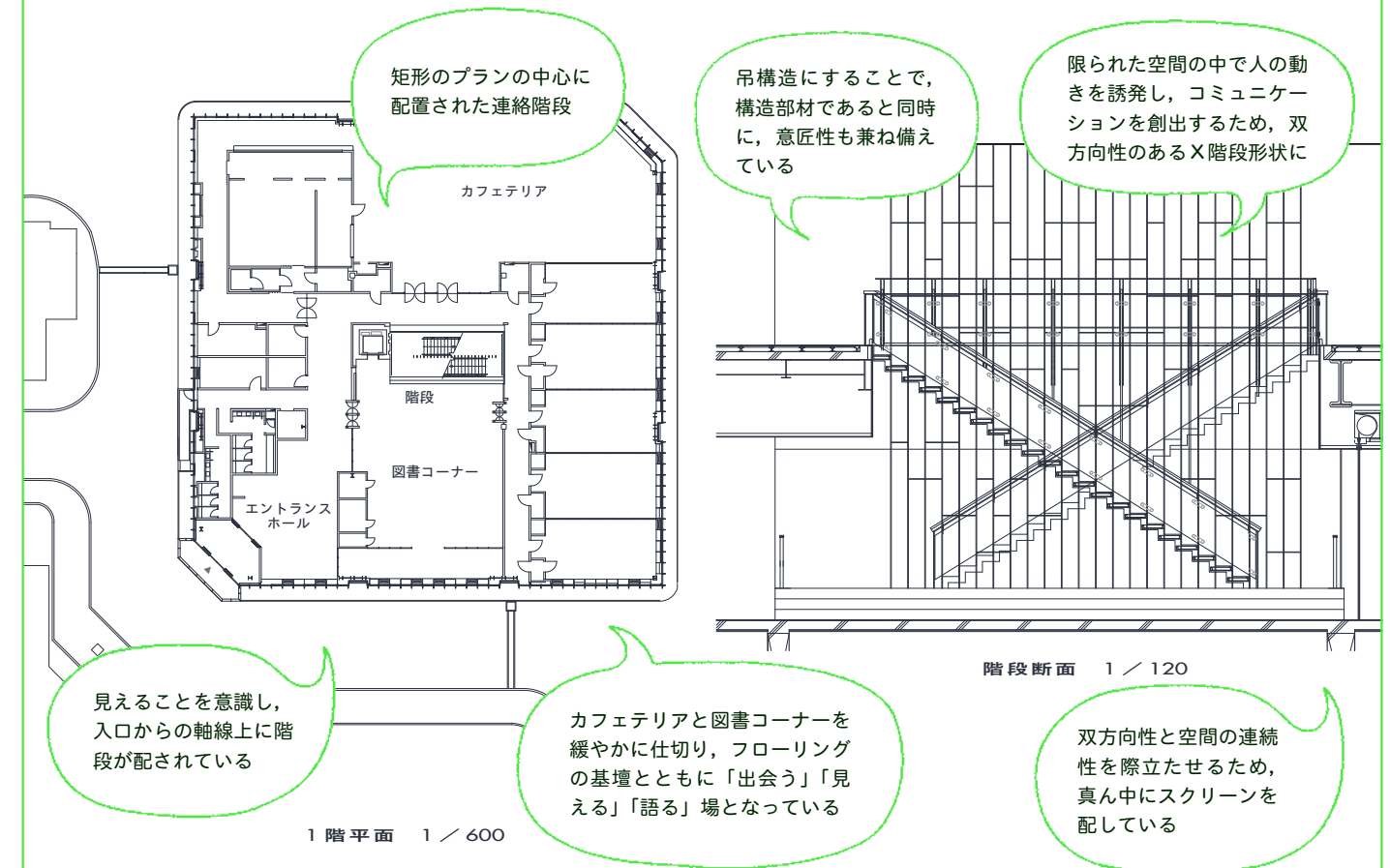
ENVIRONMENT
環境

階段表現の現代における三つの類型 象徴性から場所性へ

階段は昇降の機能だけでなく、建物全体にかかわるさまざまな機能や役割を担ってきた。近代以降、現代の階段は大きく三つの類型に分けることができる。一つ目は主に積層された階を縦に貫く直通階段であり、避難にも有効であると同時に、効率性や機能性が求められる。二つ目は、たとえばエントランスホールから上下階の主要室に移動するための連絡階段で、時にはその空間とともに建物のシンボルともなる。そして三つ目は、利用者のコミュニケーションやアクティビティを誘発するフロア構成をつなぐ

連絡階段である。前出のクローズな避難階段や、場合により機能性よりも象徴性が重視され、上る必要すらないオブジェとしての美しい階段に対して、場と場をつなぎ、空間の関係性を強調するような、より見やすく、より使われることが要求されるものである。特に業務をイノベーションするようなアクティビティ溢れるワークスペースや、空間が親密なコミュニケーションの核となることを求められる教育施設や公共施設に多く見られるようになってきたといえる。(美島)

ENCOUNTER 出会う



均質型ワークスペースから創発型ワークスペースへ

20世紀のピラミッド型（ツリー型）組織から21世紀のネットワーク型組織への転換に対応する空間構造として、均質な基準階をもつワークスペースから、ワーカーがフォーマルなレベルだけでなく、インフォーマルな部分でもコミュニケーションを取りやすく相互啓発できる「出合い」の場を提供するものによって変わってきている。当初は開発部門である研究所など、より創造的な部門での取り組みであったものが、知的生産性の向上を狙い、企画部門やデザイン

部門、また製造部門にまで広がっている。その中心となるのがミーティングもできるリフレッシュスペースや上下の移動に使われる連絡階段である。それまで避難のための階段室として閉じられ、隅に寄せられていたものがワーカーの中心的な位置に配置されるようになった。(美島)

アサヒグループ研究開発センター
(設計/日建設計)

構造・規模/S造・地上2階 竣工/2016年1月
所在/茨城県守谷市 撮影/野田東徳

吹抜けに浮かぶ透明なフィーレンディール階段

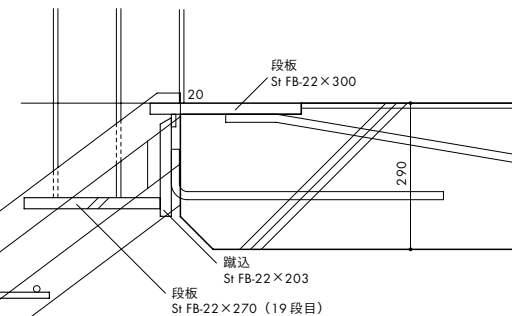
Kビル 竹中工務店



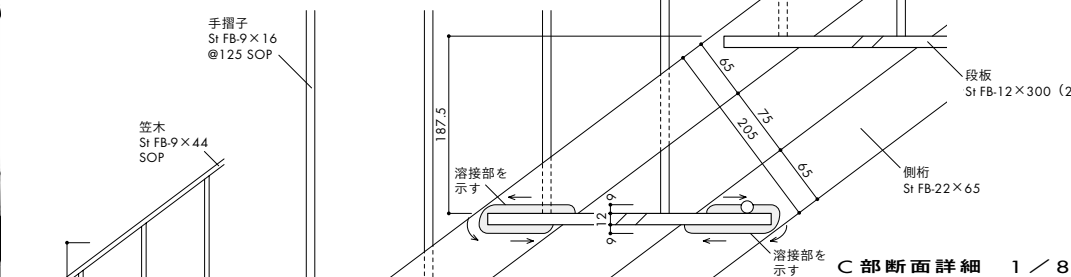
RC造事務所ビルの3層吹抜け空間に浮かぶ鉄骨階段である。2階から3階を結ぶこの階段は、日常では使わない非常時専用の階段であるため、光と視線が抜ける軽やかなオブジェとして考えた。通常の鉄骨側桁階段よりも透明感や軽快感が得られるよう、側桁と段板でフィーレンディールを構成し、上下弦材（側桁）を22mm×65mm、つなぎ材（段板）を12mm×300mmのフラットバー、応力の集中する最上下段の段板のみ板厚を22mmとして設定している。手摺もフラットバーだけで構成し

ているが、手摺子を段板面だけに溶接し、上下弦材とは離すことで、フィーレンディールの形状を明快にしている。溶接部分が意匠的にも構造的にも要となるため、ビードサイズやビードの開始点、溶接方法を入念に指定したうえで仕上げを塗装のみとし、シンプルな構造美をそのまま表すこととした。

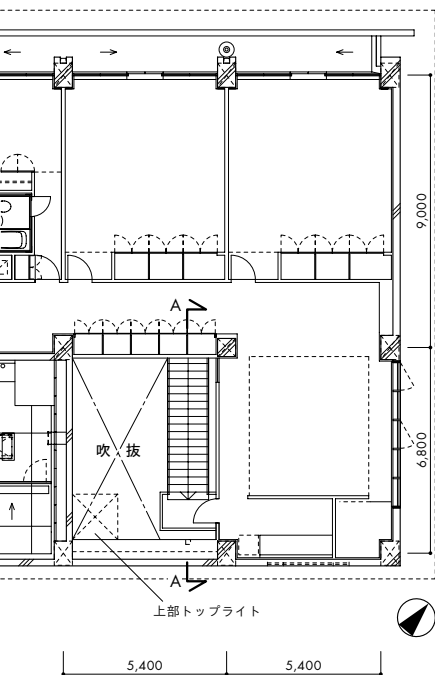
（竹中工務店 山崎篤史）



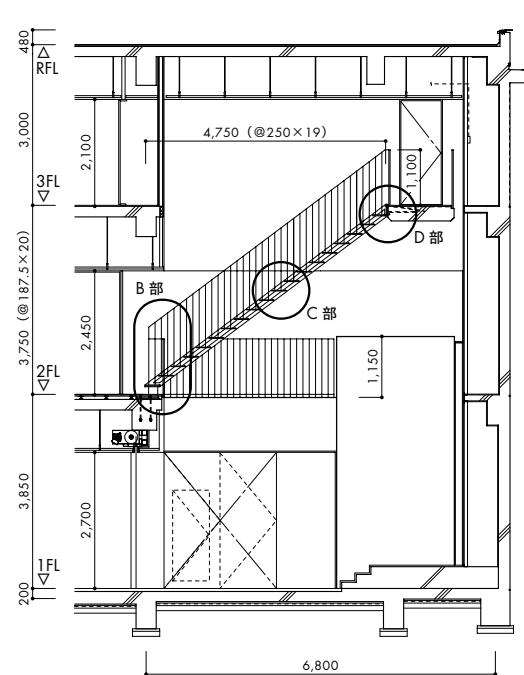
D部断面詳細 1 / 15



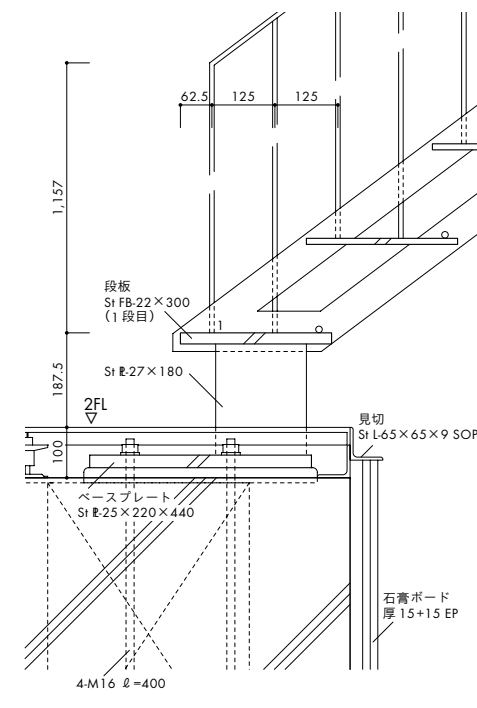
C部断面詳細 1 / 8



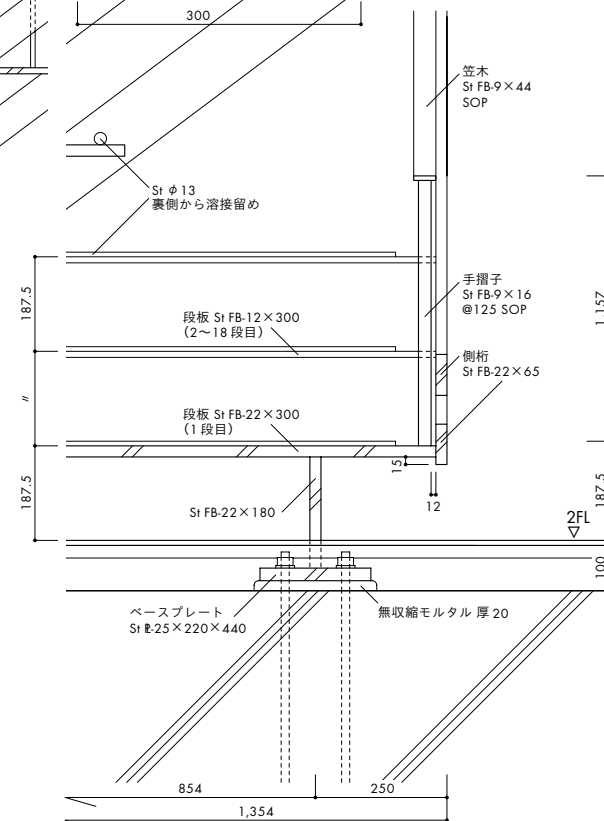
3階平面 1 / 250



A-A断面 1 / 150



B部断面詳細 1 / 15

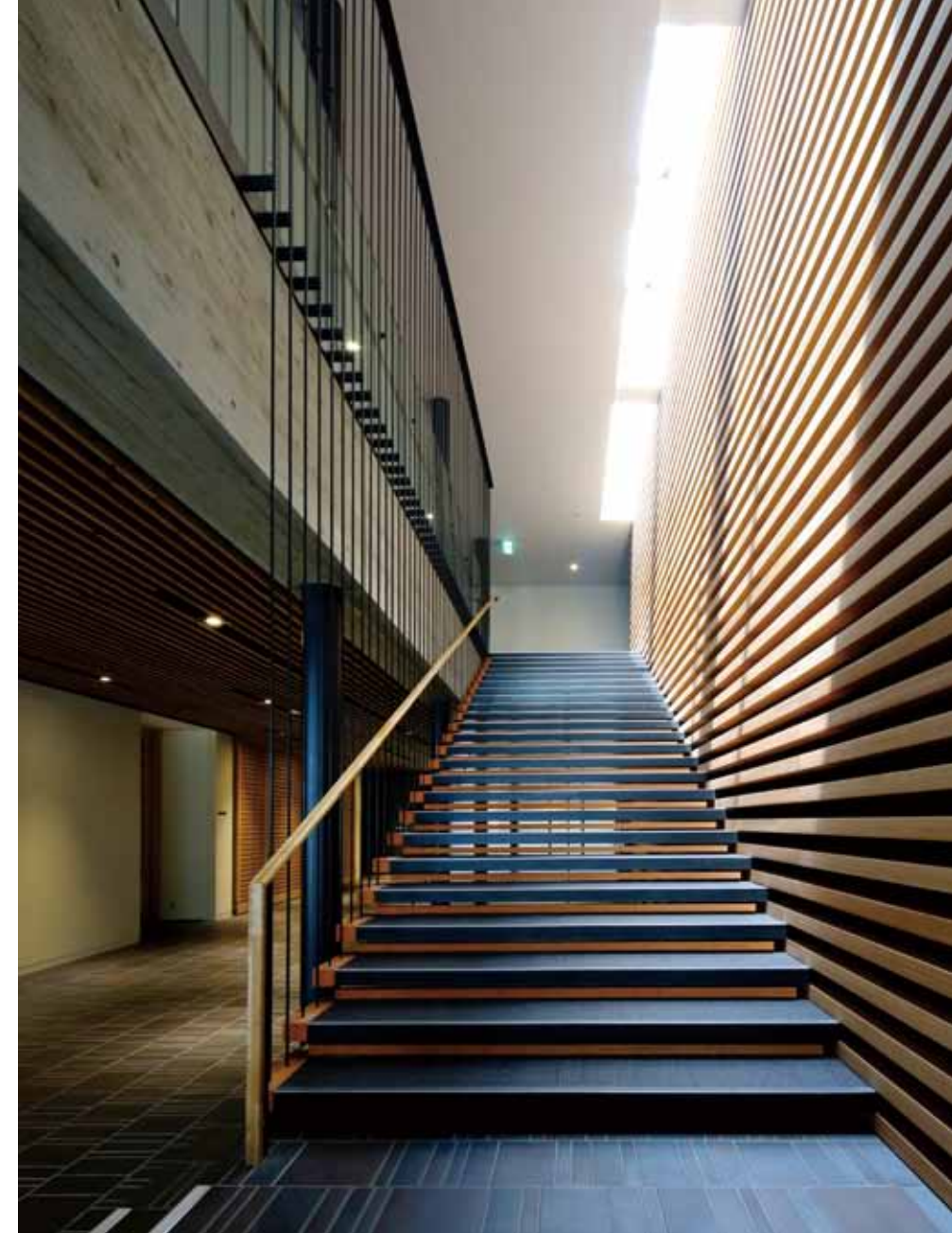


E-E断面詳細 1 / 15



水平と垂直材だけでつくられた和の設えの階段

真宗教化センター しんらん交流館 日建設計



親鸞聖人の教えを学び伝える「しんらん交流館」は、和の設えとして瓦屋根と低く抑えた軒先をもつ建築である。2階のホールや事務・研究室へ導く直線階段のある吹抜けは、壁面に杉を積層して東本願寺が積み重ねてきた歴史に見立て、壁面を頂部から自然光で照らし、印象的な空間にしたいと考えた。階段は、和の建築が水平と垂直の部材のみで構成されることに倣い、側桁の斜め材は表さず、壁の積層材の隙間から段板を一段一段跳ね出し、跳ね出された段板の端部を2本の吊り材（棒鋼）で吊る構造とした。段板の端部を覆う木のボーダーを吊り材が貫通するように納め、また、手摺はミニマムに見せようと手摺子は設けず、あらかじめ吊り材に取り付けた部材から支持している。これらの精度が求められる相番作業の納まりは、心を一つに苦心した職人達の手によるものである。

（日建設計 若林 亮）

